日本教育心理学会 公開シンポジウム

いじめの本質を理解し予防するために

Towards a Prevention Through Understanding the Essential Nature of Bullying

SHINKICHI SUGIMORI, MASASHI YASUKAWA, MINORU HASHIDUME,
SHIGEO NAGATA AND MAYUMI KASHIMA

司会・話題提供 杉 森 伸 吉 (東京学芸大学)
話題提供 安 川 雅 史 (全国ICTカウンセラー協会)
話題提供 橋 詰 穰 (東京弁護士会)
話題提供 永 田 繁 雄 (東京学芸大学)
話題提供 鹿 嶋 真 弓 (立 正 大 学)

企画趣旨

2019年度の日本教育心理学会公開シンポジウムのテーマとして、いじめを取り上げた。

いじめ問題は、1980年代半ばから大きな教育問題としてクローズアップされ、3分の1世紀あまりの間、さまざまな対策が取られてきた。それにもかかわらず、いまだにいじめ自殺のニュースがなくなる兆しが見えない。その中で、いじめは絶対的な悪であるという社会的合意が形成され、したがって「加害者」への処罰意識が高まっていると考えられる。このことは、保護者の観点からすると、自分の子どもが加害者になった場合には、わが子を守らねばならないという強迫意識にとらわれる傾向を増大させることにつながり、「絶対にわが子の非を認めない」という問題の硬直化を促進する副作用をはらんでいる。行政、教育関係者、保護者などがこぞって「いかなるいじめも許さない」という姿勢を強めても、いじめの本質を理解しなければ、いじめを予防することはできない。結果的に、いじめが生じるたびに、あたかも現代の魔女狩りのように、加害者批判が行われ、加害児童生徒や保護者は追い詰められてしまうのである。

このような社会情勢の中で育つ子どもたちが保護者になったときには、ますますいじめに対してのアレルギー反応が強まってしまい、いじめのことをよく理解しないまま、いじめをモンスター化してしまうのではないだろうか？ 自殺などの重大事態になるようないじめはもちろん予防しなければならないが、どのよう

な軽微ないじめも悪として根絶しようとすることは、本当に最も有効ないじめ対策と言えるのであろうか？ ささいないじめも起こさないことは可能かもしれないが、厳罰主義でそれが達成できるとは思えない。厳罰主義に国民レベルで陥ることは、副作用のほうが大きいのではないだろうか？

このような問題意識から、いじめの本質をよりよく理解し有効な予防を考える契機となることを意図して、本シンポジウムを企画した。

さまざまな観点からいじめに関して理解するために、文化社会心理学、臨床心理学的実践者、弁護士、道德教育、スーパー教師、などの各分野から、いじめ問題に有効な取り組みを長年行っている代表的な方々にお集まりいただくことができた。

話題提供者の紹介

企画者を除く話題提供者は、下記の方々であった。

安川雅史氏 NPO 法人全国 web カウンセリング協議会理事長、東京都知事附属機関「東京都青少年問題協議会」委員、文部科学省「学習指導要領 教育の情報化の手引き」検討委員などを経て、現在全国 ICT カウンセラー協会・ネットいじめ対策協会代表理事。不登校・ひきこもり・ネットいじめ・LINE いじめ・リベンジボルノなどから子どもを守る活動を精力的に行っている。

橋詰 穰氏 東京三弁護士会多摩支部所属。弁護士として、少年事件や児童虐待、学校問題など、子どもの権利に関わる活動に携わっている。特に近年、弁護士会の法教育「いじめ予防授業」に精力的に取り組んでいる。

永田繁雄氏 東京学芸大学附属大泉小学校教員、国立教育政策研究所、文部科学省教科調査官、中央教育審議会道德教育専門部会等委員、NHK 道德教育番組委員などを歴任。現在、東京学芸大学教職大学院教授、日本道德教育学会会長。

鹿嶋真弓氏 東京都中学校教員（理科）時代に構成的グループエンカウンターに出あい、いじめを起こさない学級づくりの第一人者として注目され、NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」（2007年）でも取り上げられるなど、高い学級経営の実力を持つ。東京都の中学校教員を中途退職し、逗子市教育研究所所長、国立大学法人高知大学准教授、教授を経て、現在立正大学特任教授。

前半の2発表でいじめ全般に関する話題提供を行い、後半の3発表で学校現場におけるいじめ対策に関する話題提供を行った。まず、趣旨説明といじめに関するさまざまな考え方を文化社会心理学の観点から解説（杉森発表）し、次にネットいじめや対面のいじめに関するネット相談を先駆的に手掛けてきた経験から具体的事例も踏まえた解説（安川発表）を行った。後半は教育現場において人権擁護の観点からいじめ予防の出張授業を行ってきた弁護士団体の取り組みを紹介（橋詰発表）し、道徳科でのいじめ予防の歴史と可能性について解説（永田発表）し、最後にいじめを生まないクラスづくりについての説明（鹿嶋発表）を行った。

話題提供後にフロアの方々より質問カードを集め、その後のパネルディスカッションでは、それぞれの質問に対して関連する話題提供者からの回答を行った。

文化社会心理学から見るいじめの本質

杉森伸吉

文化社会心理学から見たいじめの本質について、昨今のいじめをめぐる問題点も踏まえて議論した。

定義の拡大による対応件数の激増

衆知の通り、現在の文部科学省によるいじめの定義は、非常に広くなっており、一定の関係にある人物から自分がいじめられたと思えば、いじめと認定するという被害者側の主観を重視したものである。最初に文部省がいじめの定義を出した1980年代半ばにくらべ、この定義に当てはまるいじめの範囲は、はるかに大きくなった。

2013年のいじめ防止対策推進法の施行などにより、いじめに関する報告書の作成量が増加し、教師の多忙化が加速されたといえよう。いじめ対策関連で小中学校の教員が持っている疲労感や負担感について調査を行った結果では、全般的には中学校教員のほうが値が高いが、「いじめの定義が広すぎて対応に疲労感・負担感がある」という項目は小学校教員がわずかに高い。このことは、近年小学校でのいじめ報告数が著しく増加していることと関連しているかもしれない（Figure 1）。

また、「加害者が絶対に悪である」という世間のいじめ認識が浸透していく中で、加害者-被害者図式が濫用されることにより、加害者とされる児童生徒の保護者が、我が子を守ろうとして学校や相手保護者と激しく対立し、溝を深める現象も頻繁に生じている。

相互いじめ

そもそも定義を広げたことにより、いじめの加害者と被害者が、明確に分かれないケースが増えてきた。つまり、1つのいじめ現象の中でも、ある時点では加害者だったものが、別の時点では被害者になっている、つまりそれぞれのいじめ関係者が、加害者と被害者の

Figure 1 教員の疲労感・負担感

両方であるケースが増えている。私は、関係者のどちらかが被害者であり加害者でもある現象を、「相互いじめ」と名付けた。相互いじめが増加することは、いじめの定義を広げた以上必然の帰結である。

そうした状況の中でも、学校側には当事者や保護者が、自分のほうが被害者であること、したがって自分の方が同情されケアされるべき立場であると、お互いに（あるいは保護者同士が）訴えるようなケースも増えている。「自分の方が被害者であることを、より強くアピールできた方が、被害者として認められる」とばかりに、本当に苦痛にあえいでいる被害者を見ても、「うまく演技をして同情を引こうとして、ずるい」などと誤解するすれ違いも少なくないと言えよう。

「いじめ」という概念のモンスター化

前節で述べたようないじめに対する過敏な反応は、行政やマスコミが作り出してきた負の側面である。本来のいじめは、大多数が軽微なものであり、自殺に結びつくようないじめはごく一部であるにすぎない。それにもかかわらず、いじめ自殺が生じたときに世間が過敏に注目することにより、「いじめ」と「自殺」が過度に結びつくという過度の関連付け（幻相関、錯誤相関、誤った関連付け）が生じていると言えよう。いじめに付与されたこうした過度にネガティブなイメージが、いじめに対するパニック反応・過剰反応につながっている。そういった意味でも、いじめのなかで重視すべきものの優先順位をつけられる視点が必要である。

いじめの本質を理解し、ぶれない軸を作る

以上の議論から、すべてのいじめを極度にネガティブにみるのではなく、注視すべきもの、介入すべきもの、緊急対応を要するもの、など適宜レベル分けをしながら、適切にきめ細やかな対応をしていくことが、今後の教員にはますます必要になると言えるだろう。

予防の重要性の増大

身体や生命の危機をもたらすような重大いじめ事件に関しては、多くの場合はその前段階である、もっと軽微ないじめのレベルが数週間から数か月続いていた可能性がある。こうした非常に大きな問題につながる芽を持ついじめは、軽微または中程度のいじめの中に含まれているため、その芽をいち早く発見して予防することが重要である。どのような重大事件も、非常に軽いいじめの段階があるのであり、そこで適切に対応すれば、それ以上に重度化することはない。

学級集団は、仮に 30 人の児童生徒がいた場合、子ども同士のコミュニケーションパターン（一緒に会話をしている人の組み合わせ）は $2^{30}-30-1=10$ 億 7,374 万 1,793 通

りある。

実際にはあらゆる組み合わせが現れることはないだろうが、教室内の人間関係は、教師一人対子ども 30 人の 30 通りしかない、と考えることがいかに学級集団の複雑さを見落とすことにつながるかがわかるだろう。教師を入れた 31 人集団で考えると、コミュニケーションのパターンは 21 億 4,748 万 3,616 通りあり、そのうち教師が介在するものが約半分、教師がいない場所で起こるものが上述の 10 億 7 千万余りである。

要するに、教師の知らないところで行われるコミュニケーションパターンは膨大に存在する可能性があるため、「教師のいるときにいい子にさせる」のではなく、「教師がいないときに、いい仲間関係を作れる子ども集団を作る」ことが、いじめ予防の最重要点になろう。

こうした観点からすると、日常使われる言葉も重要である。他者を傷つけたり、やる気を失わせるような言葉（滅びの言葉と呼ぶ）が蔓延している集団では、いじめなどの問題を避けることはできないだろう。反対に、思いやりにあふれる言葉ややる気を引き出すような言葉（希望の言葉と呼ぶ）があふれる学級集団であれば、教師がいない場面でもいじめが生じる可能性は非常に低いと言えるだろう。

適切な対応の重要性の増大

いじめの予防がうまくいかず、不幸にしていじめが生じてしまった場合には、教師と保護者、当該児童生徒との間のコミュニケーションがカギを握るようになる。教師のコミュニケーションが、保護者や子どもの心を開き、素直で共感的な関係性を形成できるようなものであれば、当該児童生徒からの信頼を獲得し、「本音」を引き出すことができよう。しかし多くの場合、教員が当該の児童生徒や保護者と、共感的で風通しの良いコミュニケーションができないばかりか、相手に対する何らかの予断や偏見などを持って、本音を語る相手の本音を否定したり、何らかのストーリーを描いてそのストーリー通りに現実が動いてきたと決めつけたり、あるいは被害児童生徒が「大丈夫です」といった言葉をうのみにして、本当は大丈夫ではないのを見落としてしまい、重大事故につながる、などの問題が蔓延していると言えよう。

こうした問題は、ひとえにコミュニケーション力の問題であり、日ごろからできるだけ意識して教員が磨いていくべき能力資質の一つである。

ネットや対面でのいじめの本質

安川雅史

LINE いじめから不登校になり、自殺未遂

私たちの元には、お子さんや親御さんから、スマホを使ったネットいじめの相談が多く寄せられる。その中でも最も多いのはLINE いじめである。特に、LINEのグループから外されたり、裏グループを作られたりして、そこで悪口を言われたというケースが一番多い。

2014年の相談では、関東の中高一貫校に通う女の子同士のLINEグループで、ある女の子について「あの子って男の子の前と私たちの前で態度違うよね」「Aちゃんの彼氏に手出したらしいよ」と噂が広まり、その子はグループの中で無視されるようになった。その子がLINEで発言すると、みんな読んでいるのに誰も返信をしない。いわゆる「既読スルー」。さらに、裏グループが作られて、その子を隠し撮りした写真を投稿し始めた。例えば、体育の後で脇汗びっしょりになっている写真や、あくびをして鼻水が少し出ているようなところをひどいアングルで撮られて、「臭いんだけど」「気持ち悪い」「よくこれで彼氏とか作れるよね」と、みんなでその子を笑い者にしていた。あるとき、女子生徒の1人が、裏グループでのやり取りを、わざわざその子に見せてしまった。写真を見たその子はショックのあまり引きつけを起こして学校を早退し、翌日、自殺未遂で救急車で搬送された。

誰かが広めた噂やささいなケンカが、深刻ないじめに発展するSNSの怖さ

今の子どもたちは、家に帰ってからもずっと友達とLINE、TwitterなどのSNSでやり取りしている。LINE、Twitterで1日中つながっていれば、友達の欠点が目につくこともある。しかも、LINE、Twitterなどの短い文面のやり取りでは真意が伝わらず、誤解が生じてそこからいじめに発展することがある。例えば、LINEのスタンプ1つでも、相手の受け取り方によっては誤解されることもある。彼氏にふられた子を励まそうと明るいスタンプを送ったら、「私はこんなに落ち込んでるのに、なに喜んでるの?」とケンカに発展した事例もある。

フィルタリングをかけないのは親として無責任

子どもを待ち受けるスマホトラブルは、ネットいじめだけではない。性別も年齢もごまかせるネットの世界で知り合った相手を信じて会いに行き、性被害などの犯罪に巻き込まれるケースも後を絶たない。子ども自身が、ネット上で無防備に個人情報を公開したり、

見ず知らずの人とつながらないことも大切だが、親が子どもを犯罪から守るためにぜひしてほしいのが、「フィルタリング」である。

フィルタリングとは、「アダルト」「薬物」「出会い」「自殺」といったキーワードに該当する有害なサイトを閲覧できないように設定することである。警察庁の発表によると、コミュニティサイトの利用により、犯罪被害に遭った子どもの95.2%が、フィルタリングの設定をしていなかった(コミュニティサイトに起因する児童被害の事犯に係る調査結果について 平成26年上半期)。

フィルタリングは親が自分で設定することができ、設定してもLINEやゲームはできる。フィルタリングをかけなければ、どんなに有害なサイトも使い放題、見放題である。これをせずに子どもにネットを使わせるのは、親として無責任だといえる。「高校生にもなってフィルタリングなんて恥ずかしい。他の子はみんなかけてないよ」と子どもに反発される可能性もあるが、そこで感情的になって子どもを叱っても、「うるさいな」と部屋に閉じこもってしまうのは目に見えている。大切なのは、「あなたを愛していて、あなたの命を守るために設定する必要がある」ということを親が素直に子どもに伝えることである。

例えば、「気持ちはわかるけど、ニュースであなたと同じくらいの年齢の子が、スマホで悪い人にだまされて命を落とす事件が報道されていたの。お母さん、あなたに嫌われてもいいからあなたの命だけは守りたい。あなたのこと大好きだから、フィルタリングは外せない」と。親からこんなふうに言われたら、子どもは言い返すことはしない。

親の行動はお手本—子どもをスマホトラブルから守るために

まずは、「家族みんなでリビングで使おう。充電もリビングでしよう」と、家族間で決めることだ。LINEで相手を傷つけるようなことを言ったり、グループから外したりするような子はたいてい、自分の部屋にこもってLINE、TwitterなどのSNSをやっている。リビングでやっている子は、親の目があるので心理的にブレーキがかかり、相手をおとしめるような書き込みはしないことが多い。

そもそも最近は、親自身が、友達とLINEをやりとりしながらご飯を食べていたりしている。子どもは親の行動を「お手本」としてよく見ている。親がそんな行動をしていては、子どもに注意しても「ママだってやってるじゃん」と反発されて示しがつかない。「ご飯の時はスマホ持ち込まずに、家族で顔を合わせてご飯

食べようね」と決めて、親子のコミュニケーションの時間を確保することが大切だ。親子のコミュニケーションの時間があると、子どもの異変やSOSにも気づくことができ、いじめやトラブルに早く対処できる。もしも、以前に比べてあまり笑わなくなったり、学校や友達的话题を避けるなど、いつもと違う様子に気づいたら、「私はあなたの味方だから、いつでも相談してね。どんなことがあっても守っていくよ」と言ってあげてほしい。また、スマホが関わる事件や、ネットいじめを苦にした自殺が報道された時は、親子で、「どうすればこの子は被害に遭わなくてすんだんだろうね」「なぜ命を絶ってしまったんだろうね」と話し合うことも大切だ。こうしたことを家庭内で1つずつ実践していくことが、子どもをいじめの被害者にも加害者にもしない一番の方法である。

今や子どもから大人まで、幅広い世代が活用しているスマートフォン。しかし、便利だからこそ依存性も高く、「子どもが食事中もずっとスマホを触っている」と心配する親からの相談も多い。無料通信アプリ「LINE」上でのいじめや、出会い系サイト、SNSなどのコミュニティサイトを悪用した犯罪に子どもが巻き込まれるケースも少なくない。

スマホ所有率の増加に伴い、深刻な問題になっているのがネットでのいじめである。「従来のいじめは、体力的に優位な子どもがいじめの加害者になるケースが目立っていたが、ネットいじめは体力差は要素になりえない。さらに、ネットで匿名性が保たれている。誰もがいじめの加害者、被害者になりえる状況が生まれやすいのだ。

ネットいじめの具体的な事例

- ・他人のメールアドレスを使うソフトを使って、嫌がらせのメールを送る
 - ・チェーンメールを強要する
 - ・SNSなどに悪口を書く
 - ・ケータイカメラを使ってのトラブル（ネットから取ってきた裸の画像を顔にくっつけたコラージュ画像を流すなど）
 - ・LINEグループでのトラブル（メッセージを送っても無視する、「裏グループ」を作って仲間外れにするなど）
 - ・Instagramに女子生徒が男子生徒と映っている動画がアップされ、複数の同級生から「別の生徒とつきあっているのにだめじゃない」、「死ねばいい」、「視界から消えてほしい」と言われる
 - ・Twitter上に公開処刑として動画をアップする
- やったほうは、ただの悪ふざけだと思っていると、

受け手にとってはいじめである。犯罪だという感覚がないのが問題なのだ。そして、ネットいじめは親からは見えにくいもの。さらに、学校から帰っても、ネット上で24時間続いている可能性があるのだ。ネットいじめの背景も、仲間外れにしたり無視をするということと同様に、相手に対する無関心さが影響している。無関心ゆえに、こういうことを書かれたら相手は嫌な気持ちになるだろう、こういうことをされたら苦しむだろう、などと相手の気持ちを慮れないのだ。

子どもは基本的に思ったことを何でも書いてしまうし、写真コラージュなども単純に面白いから大好きなのだ。しかし、「バカだね」という言葉も、面と向かってなら笑って済ませられても、文字だと本当にバカにされているように感じる場合もある。文字で残るものは、人間関係を崩すのである。

子どもがネットいじめの加害者にならないために家庭で子どもに教えるべきこと

まず、腹が立ったときに、絶対にスマホやネット上に書き込んではいけなく伝えること。書きたいなら自分の部屋にあるノートに書きなさいと大人は子どもに教えるべきである。衝動的に書き込みをしても、書き込む前に本当に公開してよいか一呼吸おき、相手の立場になって考えてみるように伝えてほしい。感情的な書き込みはしないことが、ネットいじめの拡大を防ぐ第一歩である。インターネットに投稿した動画や画像、書き込みは完全消去が難しいので、しっかりと大人が子どもに注意喚起しなければならない。

そして、スマホを使う時間や使う場所を決めてルールをらせること。今の子どもたちは、スマホに頼りすぎて、スマホでのつながりがなくなると、友達でなくなってしまうかも、という危機感を持っている。結局、LINEで交わしている会話は、取り立てて今、話をする必要性はないものばかり。明日でいいのなら、明日学校で顔を合わせて会話をすればいいのである。スマホは、包丁と同じで、便利に使えばきちんと料理できるが、使い方を間違えると大変なことになる。今の時代の子どもの守るには、使い方を大人が分からなければならない。

アルバイト店員がバイト先でふざけた動画を撮影し、ネットで公開して炎上した案件が見られる。これも、無関心、相手を思いやれないという想像力の欠如という点では同じ問題である。

最近は、自分の興味がある動画ばかり見て、ニュースを見ない子どもが増えている。悪ふざけも一歩間違えばいじめになり、いじめが自殺につながっていくと

いうことも知らない子が多い。いじめのニュースと一緒に触れる機会がなければ「こういうことによって追い詰められる子もいるのだから、あなたも考えなければいけないよ」などといった話を親子でする機会を設けることも大切である。本当は、文字のやり取りで「(笑)」なんて書いているより、実際に会って、笑い合うほうが楽しいはず。顔を合わせたコミュニケーションの大切さを子どもに伝えてあげることも大切である。**ネットいじめの加害者にならないために**

子どもは親の背中を見て育っていきます。親同士がLINEで他の親の悪口を言ったり、先生批判をしたり、特定の親をグループLINEで外すなど絶対にやってはいけないことである。ママだってやっているなどと子どもから指摘されないようにしてほしい。

・スマホを取り上げるのではなく、ルールを決める
すでにスマホを与えてしまっていたら、取り上げて問題解決にならない。フィルタリングをかけ、食事中、入浴中、勉強中はスマホ禁止とし、居間でのみ利用させるなど家庭内でのルールを決めること。

- ・フィルタリングを徹底する
- ・迷惑メール受信拒否など徹底する
- ・不満や愚痴は、専用ノートに書かせる

子どもが、不満や悪口を発散したい時は、ノートに書かせて全世界に公開させないこと。

ネット上でSNSいじめが起こっている以上、学校を休んで家にいても、転校をしても、逃げ場はない。親はどう対応すればいいのか？

普段から、「SNSは嫌なこともある」ということを子どもに話しておき、「何かあったら、すぐ相談してね」と繰り返し話しておくことがまず重要である。スマホから離れて、親と一緒に話す時間に安らぎを得られるようにすること。そのためには、親もスマホ依存になっていないか見直すべきである。子どもにだけルールを強いるのではなく、食事中など一緒にいるときにはスマホを見ないといった親子共通のルールを作っておくことも大切だ。たとえば、充電器はリビングに置いたり、スマホを使うのはリビングだけなどのルールを決めたりすれば、布団の中で寝る寸前までSNSに振り回されるということはない。

親が、自分のSNSの使い方を見直すことも重要

Twitter上で他人を攻撃したり、LINEで周りの親や先生の悪口を言ったりする親もいる。子どもはそんな親の行動によく気づくのである。それがSNSいじめを助長する可能性もあるということは知っておいた方がいい。

では、もしわが子がいじめられていることに気づいたら？

画像などの証拠を揃えて、学校にすぐ相談すること。学校が対応しなければ、警察に被害届を出すべきである。すぐに対応しないと、いじめは続き、子どもが命を落とす恐れもある。嫌な世の中だが、それが現実。親も対応を誤ってはいけない。

引用文献

- 安川雅史 (2007).「いじめ」と闘う親と子を応援する
本一教室・ネットにはびこる悪魔とどう対峙するか
中経出版
- 安川雅史 (2008).「学校裏サイト」からわが子を守る！
中経出版
- 安川雅史 (2016). 子どものスマホ・トラブル対応ガイド
ぎょうせい

法教育として人権の観点から弁護士が考える いじめ予防授業

橋詰 稔

弁護士と「いじめ」問題の関わり

弁護士が「いじめ」の問題と関わる場面は、個別に事件を受任して代理人になる場合と、弁護士会の公益活動（第三者委員会を含む）等で参加する場合に大きく分けられるだろう。前者の例として、子どもの法律相談・代理人活動やいじめの少年事件の付添人が、後者の例として、弁護士会の人権救済申立制度、自治体の第三者委員会、いじめ予防の出張授業などが挙げられる。最近はスクールロイヤーの制度も始まり、早速採用している自治体もある。いずれの活動も、子どもの人権保障の観点を基軸に据えたものであるが、今回は、予防的観点から取り組む「いじめ予防授業」を紹介したい。

弁護士が「いじめ」を話す授業

現在、全国各地の弁護士会で、法教育の一つとして「弁護士によるいじめ予防授業」が取り組まれている。授業の対象は、主に小学生や中学生が多い。弁護士がこの授業を担う意義は、「人権」という視点から「いじめが人権侵害である」と伝えられることや、裁判になったいじめ自殺の実例を扱えることなどにある。「いじめはダメ」と規範を押しつけるのではなく、いじめがいじめを受けた子の人権や周りにいる子の人権を傷つけ、さらにはいじめをした子自身の人権をも傷つけることを伝えている。

いじめは人権を傷つける

授業の冒頭で、弁護士が人の権利（人権）を守る仕事であることを説明し、「人権」とは何かを考えてもらう。人権を児童生徒がイメージしやすいよう、人権が守られている状態とは「安心をして、自信を持って、自由でいられる」状態である、などと説明する。そして、その人権（安心、自信、自由）が、「いじめ」が起きる事で崩れていくこと、つまり「いじめは人権を傷つける」ことを理解してもらう。

いじめられる人が悪い？

クラス全員に問いかける。「いじめはいじめられる人が悪いか？」。許されるいじめはあるのかを考える。「①悪い、②悪くない、③場合によっては悪い」の選択肢から「③場合によっては悪い」に圧倒的多数が手を挙げる。具体的にどんな場合なら悪いと思うかを尋ねると、必ず「先にいじめや嫌なことをした人」という答えが返ってくる。「先にいじめや嫌なことをした人はいじめられても仕方ない（その人が悪い）」という根強い「子ども世論」に対し、それは、結局のところ、いじめの側が「いじめはいけない」とわかっていながら、感情的な理由から「こういう場合ならいじめてもいいよね」という自分への「都合のいい言い訳」をしているにすぎないことに気づいてもらう。

いじめ自殺事件から考える

いじめが、最悪の場合は「生きる権利」も奪うことを、実際にあったいじめ自殺事件を例に話す。同年代の子どもが自殺に追い込まれた気持ちを受け止めてもらうため、対象学年に合わせて中学生のケースや小学生のケースを扱っている。中学生のケースは、被害生徒を死んだと見立てて同級生らが色紙にお別れの寄せ書きをした「葬式ごっこ」のいじめで有名な中野富士見中学校の事件である。被害生徒は、中学2年生の2学期から始まったいじめが徐々にエスカレートする中で、教室に入れなかったり学校に登校できなかったりする日が増え、3学期に自ら命を絶った。被害生徒が残した遺書には、「俺だってまだ死にたくない。だけど、このままじゃ『生きジゴク』になっちゃうよ。ただ、俺が死んだからって、他のヤツが犠牲になったんじゃないか。だから、もう君達もバカな事をするのはやめてくれ。最後のお願いだ。」と記されていた。「葬式ごっこ」の色紙と被害生徒の遺書をプリントで配り、被害生徒の気持ちや、何が自殺にまで追い込んだかなどを、それぞれの立場で想像してもらう。

そして、この衝撃的な「葬式ごっこ」の色紙が、決して遠く古い世界の話でなく、実は児童生徒に身近な

「ネットいじめ」に置き換えられることを伝える。今であれば、色紙の寄せ書きと同じことをインターネットの掲示板やグループLINEでできてしまう。このような例を通してネットいじめが人権（安心・自信・自由）をどれほど傷つけるかをリアルに感じられる。

心のコップの水

いじめで自殺に追い込まれる子どもの心を「コップの絵」で表す。小さいいじめや嫌なことがコップに少しずつ溜まり、やがてコップから水が溢れるようにいじめが人を自殺に追い込む。一滴一滴は小さいいじめであるが、満杯になったコップを溢れさせるのもたった一滴で足りる。「ウザイ」「キモイ」「死ね」など、いつも何気なく口にする言葉が、「最後の一滴」になる。最初の一滴も、途中の一滴も、最後の一滴も、どの一滴も入れてはいけない。なぜなら、その一滴こそが相手の人権を傷つける言動であるからである。あなたの一言がその人を追い詰めてしまうかもしれない、それでもあなたはいじめをしようと思うか。

いじめの四層構造

いじめの四層構造論をドラえもんの登場人物にたとえる。いじめっ子の「ジャイアン」（加害者）、いじめられっ子の「のび太」（被害者）、おもしろがる「スネ夫」（観衆）、見ているだけの「しずかちゃん」（傍観者）。それぞれの立場から、どうすればいじめをなくせるか、自分には何ができるかを児童生徒に考えてもらう。

いじめっ子の「ジャイアン」は、いじめに及ぶ原因や背景を辿ると、実は自身もストレスを溜めたり傷つきがあり、それを「いじめ」で吐き出していることが多い。とすると、「ジャイアン」のストレスや傷つきをいじめの形でなく、例えば信頼できる人に話すなどして吐き出してもらう必要がある。あなたの辛さも受け止めるよ、と伝えたい。

いじめられっ子の「のび太」は、辛い気持ちを抱え込まず、信頼できる人に話したり相談したりして心の負担を減らす事が大事である。いじめから逃げる、という選択肢も与えておきたい。いじめを人に話すこと、いじめから逃げるのが、恥ずかしくも卑怯でもないことを、はっきり伝える。

観衆の立場でおもしろがる「スネ夫」が、いじめをおもしろがると、ジャイアンは「周りにウケてる」「みんなが認めている」と捉えていじめをエスカレートさせる。「スネ夫」が同調して大きくなったいじめは、もう「ジャイアン」にさえ止められなくなる。「スネ夫」がいじめに同調しないことの大切さを伝える。

傍観者の「しずかちゃん」。いじめをなくす一番大き

な力があるのは、この傍観者の人たちである。いじめを「止める」ことだけでなく、のび太の辛い気持ちを「受け止める」「支える」ことができる。その場で止められなくとも、「助けてあげられなくてごめん」「大丈夫?」「一緒に先生に相談に行こう」などと声をかけることが、いじめられる子にとって大きな心の支えになる。クラスにたくさんいる傍観者たちが、何人かで力を合わせればできることも増える。「自分には関係ない」と思っている「傍観者」にこそ、実は大きな力があることに気づいてもらう。

弁護士会の子ども専門相談

授業の最後に、子どもが無料で相談できる弁護士会の「子ども専門相談」などを案内する。いじめられて辛いときはもちろん、いじめをしてしまうことに悩んだり、いじめ以外でも不登校や虐待、親の離婚での悩みなど子どもに関する相談であれば、弁護士が無料で相談を受けてアドバイスやサポートができることを伝える。

おわりに

これまで多くの弁護士が学校に出向き、児童生徒に「いじめは人権を傷つける」というメッセージを直接伝えてきた。真剣に耳を傾ける子どもたちの表情に、この授業が子どもの心に何かを残す力があると手応えを感じている。一人でも多くの子どもを「いじめ」から守ることにつながる。

道徳科におけるいじめ抑止への取り組みについて

永田繁雄

道徳教育及びその要としての道徳科の授業が、いじめの本質の理解とその予防にどのような役割を果たすことができるか。また、その推進上どのような課題があるかについて、主として以下のことを提言した。

道徳の時間が「特別の教科」である道徳科へと位置づけられた背景と趣旨

学校教育の中で長く実施されてきた道徳の時間は、1958（昭和33）年の特設以来、約60年を経て、2015（平成27）年に小中学校の学習指導要領において「特別の教科」である道徳科へと位置づけ直された。まさに還暦を迎えて再生したともいうべきタイミングである。

この動きへの重要な契機の1つが2011（平成23）年に滋賀県大津市で生じた「中2 いじめ自殺事件」であった。そこには、子どもたちの心の危機的状況の中、道徳教育や毎週の授業がその問題に積極的な役割を果たせていないのではないかと強い懸念があった。道徳教育の充実に関する懇談会（2013）の報告書から要約

して示すならば、「いまだに道徳教育を忌避しがちな傾向がある」「他教科に比べて軽んじられている」「授業が読み物の登場人物の心情を理解させるだけなど型にはまったものになりがち」などと指摘され、検定教科書配布を伴った指導環境の充実が強く求められたのである。しかし、その報告を引き継いだ中央教育審議会では、国語などと同等の通常の教科とはせずに、「特別の教科」として位置づけた。そこには、道徳的問題のもつ主題性（教え込みではないこと）と、道徳教育で培う道徳性のもつ全人格性や内面的成長を無造作に評価しないことへの配慮があった。

道徳科の指導は、元来、現実にあるいじめ問題に対応する矯正教育や生徒指導的なものではなく、子どもの豊かな生き方を後押しする側面を有する。いわば、「いじめを生まない心」の体制や在り方を子どもの中に醸成する教育であるといえる。その意味でいじめの抑止力として有効な力を発揮する。

その視点から新たな道徳教育が特に重視するのは、主として次の2点であると私は考えている。

1つは、子ども自らが自己を開発的に考え、生き方の選択肢を広げていくことを期待していることである。「よりよく生きる（縦軸）」と、「共に生きる（横軸）」及びそれらの融合された「共によりよく生きる（斜め軸）」という方向性が、道徳教育の目標として一層明確に投影されている。

いま1つは、子どもの生命観の深まりをより重視したことである。道徳教育用教材として全児童生徒に配布され「心のノート」の中学校編（文部科学省、2002）に、その「唯一性」「神秘性」「連続性」などが例示され、教員の指導上の指針として長く生かされてきた。今次の改訂では、その多彩で深い見方を醸成する視点が、内容構成の上でも配慮されている。

改訂された道徳科指導の目標、内容、教材

では、道徳科の指導は、いじめの予防に関してどのように働くことが期待されるだろうか。その目標、内容、教材の視点から以下で検討する。

道徳科の目標にみる改善 まず、新たに示された目標には「道徳的諸価値の理解」を基に、「多面的・多角的」な思考を通して、「生き方についての考えを深める」という学習の筋道のイメージが付与された。この前者は価値理解であり、後者は価値観形成につながる。子ども自らの主体的意志と判断による価値観形成に基づく生き方形成に比重を置いていることを読み取ることができる。

内容項目についての改善 道徳の内容項目の改善も、

特にいじめに関する課題について取り組みやすい状況を生んだ。例えば、どの学年段階も全内容項目の最初に「善悪の判断」や「自主、自律」等を置くなどして、内容項目が「教える」ものではなく共に「考える」課題であるとの性格を明確にした。

具体的な内容項目についても、「公正、公平」をすべての学年段階に示し、「寛容、謙虚」を小学校中学年から指導できるようにするなど、いじめの課題を取り上げやすい内容構成が配慮されている。

指導する教科書教材における充実 教科書は、小中学校ともに8出版社の検定申請により、多彩な教材の環境が整えられ、その全ての冊子にいじめに関する題材や課題が織り込まれた。もちろん、各学校では教科書のみ使用に終始するわけではないが、その内容は、ア：童話や物語、イ：伝記や報道などによる実話を生かす間接的アプローチだけでなく、ウ：社会性プログラムを生かす活動、エ：テーマ討論を生かすものなどの直接的アプローチも多くみられ、授業展開の多様さを生み出す力を与えている。

問題意識をもった「自分事」としての多面的・多角的思考を重視する展開

いじめ抑止の視点から、実際の道徳科指導はどのようになされるべきか。新たな趣旨に基づくならば、私は、次の3点を重視すべきだと考えている。

1つは、いじめに関しての「問題意識」を明確にした主体的な取り組みとすることである。2つには、子どもの「自分事」としての受け止めを重視することである。そのためには、自我関与や体験活動を生かした当事者意識をもたせることが肝要になる。その上で、3つには、子どもの「多面的・多角的思考」を促すことである。「多面的」とは多様な側面から分析的に思考することであり、「多角的」とは多様な角度へと自己の考えを選択的に指向し、立場を明確化することである。

例えば、中日新聞の記事を取り上げた道徳教材「いじめと生きる」(永田他, 2012)は、小学生の時にある女子をいじめてしまった女性の22年後の後悔を綴った実話であるが、子どもが強い問題意識をもって教材に出会えば、自分事化した課題も明確になる。例えば、「それを聞いた相手はどう思うか」というテーマならばその背景や心理の多面的・分析的思考が、また、「このことをどう考えるか」と問えば、意見が多角的・選択的な議論の中で、子どもが自己の考えを一層鮮明にしてく。

浜田広介による名作童話「ないた赤おに」のように、村人の鬼たちへの排斥心理を扱った教材でも、上記と同様の話し合いの場は種々に設定が可能だ。主人公の

心情を時系列に追いがちな授業が広くみられてきたが、例えば、次のような発問は授業を活性化させる。

「青鬼の作戦は、これでよかったのか」

「あなたは、この二人の鬼の友情をどう思うか」

高学年や中学校段階にもなると、中には、「本当に問題なのは村人だ」「これは人権問題だ」などと異なる視点からの課題を見つける子どもさえいる。種々の間接的アプローチにより、子どもの中にいじめ問題に向き合う心の構えが価値観として育まれていく。

なお、ここでは十分に上げられないが、例えばロールプレイやディベートなど、意見の対立や人物への投影を軸にした場の設定の中で問題解決的思考を進める直接的アプローチの方法もさまざまに実践されている。これらの両面を生かすことによる相乗効果が、道徳科の指導で期待されている。

開発的な授業でいじめ問題の抑止力を強化する

今回の改善の中核である「考え、議論する道徳」の趣旨に立ち、子ども一人一人に自己の生き方としての「納得解」を生み出すように促す開発的な道徳授業、それが、いじめ問題の抑止力になるのである。

引用文献

道徳教育の充実に関する懇談会(2013). 今後の道徳教育の改善・充実方策について―新しい時代を、人としてより良く生きる力を育てるために 文部科学省 文部科学省(2002). 心のノート(中学校編) 永田繁雄・山田 誠編(2012). 実話をもとにした道徳ノンフィクション資料 図書文化社

いじめを予防する学級づくり

鹿嶋真弓

2013年9月に施行されたいじめ防止対策推進法(以下「推進法」)では、いじめ防止等対策について、文部科学省(以下「文科省」)がそれまで示してきたいじめの定義をより広く改めた。このように広く定義されたことで、教育現場では、いじめの捉え方を教職員で再確認し深刻化しないよう、迅速な対応を行うことが期待できる。その反面、いじめの定義が広すぎて、解決のためのストラテジーを立てにくいのも事実である。ここでは、いじめに発展させないための事例と具体的対応、学校心理学における3段階の心理教育的援助サービスの視点に基づいた、いじめの起こりにくい学級づくりについて話題提供を行った。

学校現場に潜む「いじめ」の原因とその対応

「いじめの原因は空気」と言われるようになったのは、

2014年6月6日に毎日新聞が配信した、いじめを苦に自らの命を絶った中学3年生松竹景虎君の作文「(前略)いじめの原因は空気だ。解決するには、みんなが親友になること。笑顔の大切さを忘れずにいたい。」に起因する。そのような空気をいつだれがどのようにつくったのか、ここでは、教師がつくりだすいじめと子どもがつくりだすいじめの2点に焦点をあて、その対策について紹介する。

教師がつくりだす『いじめ』

【事例1】音楽室への移動の際、ひとりだけ教室に残されたA男の訴えに対する対応 入学後一か月が過ぎたころ、A男から「いつもみんなが僕だけ置いて行く」との訴えがあった。4月下旬の家庭訪問の際、小学校時代にいじめにあっていただの保護者からの情報もあり、中学校でもいじめを受けるのではという心配もあった。しかし、今回の場合、いじめに発展させないためにも、誰かと一緒に音楽室に移動できればA男の訴えは解決すると考え、対応することとした。

入学以来、A男は、昼休みには校庭で数名の男子生徒と一緒にバスケットをしたり、10分休みには同じ班の生徒と楽しそうに話したりしていた。そこで、翌週の音楽の授業前の休み時間に、「(いつも一緒に遊んでいる)〇〇さんたちに『音楽室に一緒に行こう』って誘って見たら?」と促した。A男が誘いに行くと、何もなかったかのように一緒に音楽室へ移動して行った。

この事例の場合、「誘う」というスキルが不足している、あるいは「誘う」ことが苦手な子どもにありがちな状況と考えられる。A男の訴えに対し、教師や保護者が「もしかして、いじめられている?」と聞き返していたら、その後、どのように対応すればよいのか見通しが持ちにくくなる。いじめ行動として、仲間はずれ・無視・からかい・悪口・落書き・いやがらせ・脅される・暴力をふるわれるなどあるが、「いじめ」という一言でくくってしまうと、どのような行動が修正さ

れればそのいじめが解決するのか、具体的行動レベルでイメージできない。具体的行動レベルでイメージできないことへの対応策や解決像もまたイメージはできない。故に、あえて「いじめ」という一言でくくらず、どのような行為に対して苦痛を感じているのかを受け止め、その行為がなくなるよう、丁寧に対応することがいじめを深刻化させない方法と考えられる。

【事例2】教師の何気ない一言や対応 授業中、勝手に離席するB男への教師の何気ない一言によって、いじめを誘発する場合もあれば、離席の頻度を減らす場合もある(Table 1)。

学級には、気になる子や発達に課題のある子などいろいろな子がいる。どの子に対しても、常に、その子のできていることに注目し、小さなプラスの変化を見逃さず、すかさず承認の声かけをすることが重要である(鹿嶋, 2016a)。教師の承認の声かけは、子どもたちのモデルとなり、自然といじめの起こりにくい学級へと成長していく。また、承認の声かけはいつでもどこでも活用できる。教師が承認の声かけで大きな流れをつくると、他者のよさを見つめる雰囲気学級全体に広がり始める。

子どもがつくりだす「いじめ」

いじめを受けた子を被害者、いじめを行った子を加害者と区別し、いじめを受けた子へは支援、いじめを行った子には指導するだけでは、いじめの根本的な解決にはならない。子どもがつくりだすいじめの要因として、引き下げの心理と自尊感情の低さが考えられる。まずは、教師が子ども一人ひとりとつながり、次に子ども同士をつなげる取り組みをすることが大切である。具体例としては、構成的グループエンカウンター活動後、振り返り用紙の「感じたこと・気づいたこと」に書かれたことを、名前を伏せランダムに読みながら、すべての子に対しプラスのフィードバックをする。誰の書いたことを読んでいるのか知っているのは、書い

Table 1 B男への教師の指導行動とそれに伴う生徒やB男の行動および学級の状況

	生徒の行動	B男の行動	学級の状況
「席に戻りなさい。」と注意する。	周囲の生徒たちも一緒になって「席につけよ!」「何やってんだよ、授業中だぞ!」など、大声で注意をしはじめる。授業後も、教師が見ていないところでB男に対し暴言や暴力をふるったりする。	離席の頻度が増える。徐々に教室に入れなくなり、不登校になる場合もある。	B男に対して、大声で注意することは当たり前行動となる。B男以外の生徒へも同様の行動が増える。
離席後、自ら戻り着席したとき、B男の近くまで行き「今日は〇分で戻れたね」と告げる。	B男が離席後、戻ってきたとき、「先生! 今日、B男は〇分で戻れたよ。」と教師に報告したり、B男に、今、何をすればいいのか、授業の流れをそっと伝えたりする。	離席の時間と頻度が徐々に減る。周囲からも受け入れられ、授業中の班活動にも参加しやすくなる。	B男に対して、プラスのストロークが増える。学級全体でもあたたかい言葉かけが増える。

Figure 2 3段階の援助サービス，その対象，および問題の例

Table 2 心理教育的援助サービスに基づいたいじめの起こりにくい学級づくり

一次的援助サービス	互いに認め合い高め合える学級づくり 役割交流：係・当番活動など 感情交流：学校行事や構成的グループエンカウンターなど 知的交流：ひらめき体験教室（鹿嶋，2016b）など
二次的援助サービス	能動的に子どもの困り感に気づく 観察法：休み時間・授業・活動の様子 調査法：アンケートや生活の記録 面接法：個別面接・集団面接
三次的援助サービス	特別な対応と保護者との連携 つながりのある教師との個別相談 校内支援委員会等での情報共有と支援の方向性の確認 チーム支援（学校全体でのかわり・見守り体制）

た本人と教師の二人だけである。この学級全体の中での匿名性が教師とその子をつなぎ、また、教師からのプラスのフィードバックが子ども同士をつなげることになる。

いじめの起こりにくい学級づくり

学級の状態が良いときは、不登校、いじめ問題は減少し、学力も向上する。また、通常学級での特別支援教育の推進も可能となる。そのためには、学校生活、授業、学級活動などを充実させることが大切である。

学校心理学では、学校教育は、児童生徒が「個人として生きる力」や変動しつつある「社会で生きる力」を育てるというヒューマン・サービスを行っているという視点に立ち、3段階の心理教育的援助サービスという考え方を提唱し、援助サービスの充実化を目指している（石隈，1999）。いじめ問題は、三次的援助サービス（Figure 2）に属するが、いじめ予防は、一次および二次的援助サービスとして取組むことが重要である（Table 2）。

さらに、これらの取り組みは、イベント的に行うの

ではなく、日常的に行うことで学級集団の体質改善が図られると考えられる。その際、活動のねらいを明確にし、教師はその活動のゴールイメージを子どもたちに伝えること、活動後には、感じたことや気づいたことなど、本音を語りやすくする時間をつくることで、いじめの起こりにくい学級づくりが促進されることが考えられる。

引用文献

- 石隈利紀（1999）. 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- 鹿嶋真弓（2016a）. うまい先生に学ぶ学級づくり・授業づくり・人づくり 図書文化社
- 鹿嶋真弓（2016b）. ひらめき体験教室へようこそ—考えることが楽しくなる発想力と思考力のゲーム 図書文化社
- 松竹景虎（2014）. 夏休みの作文（いじめテーマ） 毎日新聞